

北海道中央ユーラシア研究会 第109回例会

西シベリア・タイガ地帯の原油開発とトナカイ飼育民社会
大石侑香

(首都大学東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程)

日 時：2013年9月3日(火) 16:00-18:45

場 所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401

討論者：後藤正憲(北海道大学スラブ研究センター助教)

司会者：宇山智彦(北海道大学スラブ研究センター教授)

出席者：12名

<報告要旨>

現在、西シベリアは石油・天然ガス生産の最も盛んな地域のひとつとなっている。その一方で、採掘地域のタイガやツンドラには北方少数民族らが現在もトナカイ牧畜等をして生活を続けており、自然環境の悪化や住人と開発側の土地をめぐる利権がしばしば問題となっている。中でも西シベリア・ハンティ-マンシ自治管区のヌムト湖周辺は今まさに石油開発が進行し始めた地域であり、そこに居住するハンティと森林ネネツ等といった北方諸族と石油関連企業との利権をめぐる交渉が始まりつつある。この地域は、現代ロシアにおいて、地理的にも政治・経済的にも中心から遠いところに位置する周辺的特徴を持つ。しかし、周辺の社会と開発の諸問題で議論されるようなネガティブな反応に反して、ここの住民たちには開発を歓迎する雰囲気が見られる。そこで、発表では、進行する石油産業というマクロな政治経済に対する彼らの反応を検討し、現代ロシアと周辺の北方諸族社会の関係について考察することを目的とした。まず、ソ連崩壊後のシベリアのトナカイ飼養民の社会・経済的变化に関する先行研究からヌムト湖周辺地域の事例を位置づけた。次いで、旧国営農場から現在の複合的生業に至る経緯とその実態を明らかにした。そのうえで2011年11月から2012年3月にかけてヌムト湖周辺地域で行ったフィールドワークのデータを基に、採掘場が近隣に設置されることのメリットと石油開発をめぐる現れるヌムト社会をとりまく諸アクターの相互関係に関する一事例を報告した。



旧ソ連崩壊後の社会・経済的变化と複合的生業の現状に関しては、ヌムト湖周辺の人々は、旧ソ連崩壊後、再編された村営ソフホーズで働くことではなく、世帯ごとに集団化以前の状態に近い形で地理的に拡散して居住し、複合的生業を営む生活を選択したことが分かった。これによって、行政単位としての社会的凝集性が脆弱になり、経済活動や権力関係は世帯それぞれが対処するものとなった。

地方行政の統治体制に関しては行政登録上の役割が大部分を占め、ソ連時代の国営農場のように経済と結びついて統治するという性格は失われている。社会主義的政治経済に組み込まれていた彼らの生業・生活の単位(氏族や共同体)は、地方行政統治からより遠い

ところに位置するようになり、さらに地理的に拡散して居住することにより、ロシア社会のさらに周辺に戻ったように見える。しかし、このような状況で、彼らは開発の波に居住地を追いやられるだけではなく、組織ではなく個別的にだけども、むしろ積極的に石油関連企業の施設や援助・報償を利用し、且つそのまま自分の居住地に住み続けて複合的生業も継続しようとしている。このように、政治・経済的な再周辺化状況は必ずしも、すべての面で周辺へ行っているとは限らない。むしろ、現在報償やインフラ整備、現金獲得といった面で中心的役割を担っている石油関連企業にアクセスしやすくなっている。したがって、彼らにとって政治・経済的再周辺化は、ソ連崩壊後の混乱と石油開発による生業環境の危機に対処するための生き残り戦略という一面も持っているといえるだろう。

【記：大石】

<参加記>

討論者の後藤正憲氏が指摘したように、ロシア極北地域は流通（北極海航路）や資源開発（石油・天然ガス・ウラン）との関係で現在非常に脚光を浴びながら、特に西シベリアについては研究が比較的進んでいない地域であり今回の報告は貴重なものとなった。後藤氏からは対立概念にもとづき問題設定する際の諸概念の精緻化の必要性和、ソ連崩壊前後の連続性への着目についての有益なコメントを得た。さらに、氏はソ連時代の国営企業／現在の石油企業と住民との関係性、テリトリーを巡る住民間の争いの調停問題、外来労働者と住民との関係、北方諸族間との関係などについて重要な質問を行なった。

また、会場からはトナカイ飼育の実態に関する質問、どのような場面で民族範疇が顕在化するのかという質問、都市部と調査したフィールドとの関係、補償や援助の基準など様々な質問がなされ議論は大いに盛り上がった。また、人々が集団交渉を取らず個別交渉を行なう理由、統治と経済の関係についての参加者からの示唆も興味深いものだった。



大石氏の研究は現代社会で我々が直面しているアクチュアルな問題との共通性がある一方で、司会の宇山智彦氏が指摘するように植民地帝国と現地住民との関係に共通するような事象として歴史研究との比較も可能な非常に広がりを持つものであり、今後の研究の更なる発展が期待される。

【記：井上岳彦（日本学術振興会特別研究員／北海道大学スラブ研究センター）】